**特別合同シンポジウム：今ふたたび平和と宗教と公共を問う**

**「平和と神道の問題性と宗教の未来～ゆずりとゆるしによる変容と公共」**2016年10月16日鎌田東二

はじめに～

1. 被災地の神社とお寺～東日本大震災後の日本の宗教と地域社会と公共
2. 現代大中世論～乱世論～スパイラル史観
3. 出雲神族における芸術芸能のワザヲギと敗者の呼び声（青伏垣神事、隼人舞）敗者のワザヲギ
4. 出雲大社も天神社も敗者・隠退者の鎮魂神社だが、靖国神社は違う近代の英霊顕彰神社。その差異。

１、宗教と「ゆるし」（赦し・許し）の問題

①主催研究会：科研「身心変容技法」研究会について

②宗教の基本三要素～神話・儀礼・聖地

③教義～「ゆるし」をめぐって～怨親平等（仏教）、兼愛無私（墨子）、赦しと愛（キリスト教）

④宗教の逆説あるいは意義～人間心理的には許し難いことを慈悲や愛や超人間的な世界視点などによって「ゆるす」

２、神道における平和創造を『古事記』神話から読み解く～大国主神の「国譲り」問題～「ゆずり（譲）」と「かくり（隠・幽）」

①スサノヲの系譜

②国つ神としての大国主神と猿田彦神

③「国譲り」と天孫降臨神話

④「国作り」の神「大国主神」は、なぜ、「国譲り」できたのか？　表裏・顕幽・陰陽の分岐設定と共存

⑤「あれか、これか」ではない、「あれも、これも」の日本的霊性（アマテラス系＋スサノヲ・オオクニヌシ系）

⑥『古事記』と「天の岩戸開き」

・『古事記』上巻のストーリー＝四つのステージの展開

①起＝国生み神話～伊邪那岐神と伊邪那美神のみとのまぐはひによるが、最後に火の神カグツチを産んで伊邪那美神は黄泉国に「神避（かむさ）る」。そして、高天原と世界の最大の危機が、須佐之男命の乱暴狼藉による天照大御神の天岩戸隠れで、それを打開する生存戦略が祭りの開催であった。

②承＝国作り神話～天上世界である高天原の物語ではなく、地上の国の物語である。そこでは、大国主神と少名毘古那神が主人公となって、この世界を豊かな国土に作り上げる。

③転＝国譲り神話～大転換：だが、その作り上げた大切な国土を大国主神は、天照大御神の子孫の天孫に譲ってしまう。その際、その「国」の主宰神である大国主神は自ら決断せずに、わが子の事代主神と建御名方神の二神に意志決定させるという不可思議な行動を取る。

④結＝国治め神話～結末として、国治め神話が語られるのだが、これまた一筋縄ではいかず、天孫ニニギノミコトの天孫降臨、ホデリノミコト（海幸彦）とホヲリノミコト（山幸彦）のサチの交換と対立、ウガヤフキアヘズノミコト、そして、『古事記』中巻の「かむやまといはれひこのみこと」（初代神武天皇）と日向三代が続き、四代目のカムヤマトイハレヒコノミコトになって初めて「神世＝神代」から「人世＝人代」となり、初代天皇神武の誕生となる。中巻は神武天皇から応神天皇、下巻は仁徳天皇から推古天皇まで。

３、大本と大本事件～第二岩戸開き（世の立替建て直し）における平和と宗教と公共

「世直し」宗教としての幕末維新期の神道系新宗教

A:黒住教・天理教の「陽気ぐらし」

B:金光教の「取次」（神とのカウンセリング？）＝「心直し」？

C:大本教の「世の立て替え建て直し」＝世直し運動

①「二度目の岩戸開き」（＝大本の世の立て替え・立て直し運動）～「三千世界の大洗濯、大掃除」＋仕組み（経綸）＋御用＋雛型

②「新つ世」「神国の世」元の世の到来

③神懸り的「お筆先」（出口なお→『大本神諭』出口王仁三郎）と「霊学」

④霊主体従（出口王仁三郎）～そのために「霊学（鎮魂帰神法）・言霊学」、後には『霊界物語』と明光社の芸術運動～これが「スサノヲの道」

「三ぜん世界一同に開く梅の花、艮の金神の世に成りたぞよ。梅で開いて松で治める、神国の世になりたぞよ。日本は神道、神が構はな行けぬ国であるぞよ。外国は獣類の世、強いもの勝ちの、悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獣の世になりて居るぞよ。外国人にばかされて、尻の毛まで抜かれて居りても、未だ眼が覚めん暗がりの世になりて居るぞよ。／　是では、国は立ちては行かんから、神が表に現はれて、三千世界の立替へ立直しを致すぞよ。用意を成されよ。この世は全然、新つの世に替へて了ふぞよ。三千世界の大洗濯、大掃除を致して、天下太平に世を治めて、万古末代続く神国の世に致すぞよ。神の申した事は、一分一厘違はんぞよ。毛筋の横巾ほども間違いは無いぞよ。これが違ふたら、神は此の世に居らんぞよ。／　『東京で仕組を駿河美濃尾張大和玉芝国々に、神の柱を配り岡山』　天理、金光、黒住、妙霊、先走り、とどめに艮の金神が現はれて、世の立替を致すぞよ。世の立替のあるといふ事は、何の神柱にも判りて居れど、何うしたら立替が出来るといふ事は、判りて居らんぞよ。九分九厘までは知らしてあるが、モウ一厘の肝心の事は、判りて居らんぞよ。三千世界の事は、何一とつ判らん事のない神であるから、淋しく成りたら、綾部の大本へ出て参りて、お話を聞かして頂けば、何も彼も世界一目に見える、神徳を授けるぞよ。」（明治25年旧正月）

「お照しは一体、七王も八王も王が世界に在れば、此世に口舌が絶えんから、日本の神国の一つの王で治める経綸が致してあるぞよ。外国は獣の○であるから○○に致すぞよ。この日本は神国の世であるから、肉食なぞは成らぬ国を、余り汚して、神は此の世に居れんやうに成りたぞよ。世界の人民よ改心致されよ。元の昔に戻すぞよ。ビツクリ箱が明くぞよ。神国の世になりたから、信心強きものは神の御役に立るぞよ。今迄はカラと日本が立別れて在りたが、神が表に現はれて、カラも天竺も一つに丸めて、万古末代続く神国の世に致すぞよ。（中略）　この神が天晴表面に成りたら、世界を水晶の世に致すので在るから、改心を致したものから早く宜く致すぞよ。水晶の神世に成れば、此世は思ふやうになるぞよ。水晶の霊魂を調査て神が御用に使ふぞよ。身魂の審判を致して、神が綱を掛るぞよ。ツナ掛けたら神は離さぬぞよ。／　此日本は結構な国であるぞよ。元は神の直系の分霊が授けてあるから、外国の霊魂とは一段も二段も上の身魂であるぞよ。言葉もその通りであるぞよ。夫れに今の日本の有様は、全然外国と同じ事に曇りて了ふて、神国の名ばかりに成りて居るから、元の先祖の神は悔しいぞよ。／　是から世界中神国に致して、世界の神も仏も人民も、勇んで暮さすぞよ。神、仏事、人民なぞの世界中の洗濯致して、此世を返へすぞよ。信心強きものは助けるぞよ。信心無きものは気の毒ながら御出直しで御座る。神は気を附た上にも気を附るぞよ。／　モ一ツ世界の大洗濯を致して、根本から世を立直すから、世界が一度に動くぞよ。東京へ攻めかけるぞよ。○○○は綾部に守護が致してあるぞよ。あとは宜くなりて、綾部を都と致すぞよ。世界には何でなり共見せしめがあるぞよ。綾部に天地の神々のお宮を建て、三千世界を守るぞよ。世界がウナルぞよ。世界は上下に覆るぞよ。此世は神国の世であるから、善き心を持たねば、悪では永くは続かんぞよ。金神の世になれば何んな事でも致すぞよ。珍らしき事が出来るぞよ。」（明治26年）

４、現代の課題

①　宗教の意味と意義～その危険と可能性

②　平和の困難と希求～「安心」の創造

③　公共価値の共有～人間的公共と生命的公共（「生態智」的公共）～「生態智」～地球環境全体のバランスの中での「生命の安全」と「安定・平和・平安」～「生態智」とは「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの知恵と技法」

④　「平安郷（饗・響・共）」建設と超宗教性

1. 「三度目の岩戸開き」はどのようにして可能か？
2. 未来に向かって宗教教団の進むべき道――公共性の自覚と利他の実践
3. シン（新・真・清・親・賑・深・信・心・芯・進・晋・神・森）文明創造-平安文明創造

⑧　自然災害多発時代における「シン文明創造」とは？

1. 公共性～社会性のあり方の再編
2. 利他～人間性のあり方の再構築
3. 相互賦活・相互扶助～responsibility(責任＝応答能力・応答可能性)～他者と向き合う

⑨超宗教・超宗派交流・協力・協働～祈り、芸術・芸能、聖地創造：Arts of peaceとしての身心変容技法

『古事記』の「和平」思想としての「国譲り」（鎌田東二企画・編『講座スピリチュアル学第3巻　スピリチュアリティと平和』BNP,2015年）

　日本における平和思想と平和実践を考えようとする時、最古のテキスト『古事記』を外すことはできないだろう。その中に、どのように「平和」思想と実践の形が示されているかが、その後の日本社会の作り方やあり方と無関係ではないからだ。　だが、最古のテキストとされる『古事記』は実に奇妙な書である。第一の正史で二番目に古い歴史書とされる『日本書紀』もまた奇妙な書である。どのようにこの二書が奇妙であるかというと、まず『古事記』では、「大国主神」という葦原中国の統治者である「大国の主の神」がせっかく一所懸命に「国作り」した国を「天照大御神」の孫のニニギノミコトに「国譲り」をするからである。だとすれば、天照大御神は二宮尊徳が言うように「推譲」の道を開いた神ではなく、国奪いの道を指令した神と言うことになるが、そこが『古事記』と『日本書紀』という二種の神話歴史書の不思議なねじれ現象である。一般には「略奪」とか「征服」とかになるはずであるが、しかしそのいずれでもなく、「国譲り」という特異な“和解策”が編み出されたことになるのだから。大国主神の「国譲り」とはどのような精神性と思想性を内包しているのか？　それが問題となる。

　普通、このようなことが起りえるだろうか？　「国譲り」などという事態が。いや、起こりえないだろう。だとすれば、これは極めて稀なるケースである。だがそれは、その後の日本の歴史の平和交渉と平和実現の原型的モデルとなった。この大国主神の「国譲り」が神話的モデルとなって、「大政奉還」を経て明治維新の時も、昭和二〇年八月十五日の敗戦時の際も、一種の「国譲り」が行なわれたと言えるのではないだろうか。そしてそれは日本の平和主義の特殊性を示すものではないか。

　さて、大国主神は極めて日本的な神である。スサノヲが戦うアグレッシブな戦士的な神であるとするならば、大国主神は戦わない神、和解や和睦を作る神である。それが「縁結び」の神とされる原基的な理由であろう。自らの意思決定と主体性によって成し遂げる神ではなく、さまざまなものの助けと協力によって国土開拓の大事業である「国作り」を成し遂げ、大いなる和と協調を生み出す神、戦いによって奪い取るのではなく、耕作と協調によって和楽の世界を築き上げる神、そのような神性・神徳を持つ神が出雲の神・大国主神である。

　例えば『広辞苑』には「国譲り」の語句説明として「①記紀神話で、天照大神の神勅によって大国主神が国土を皇孫にゆずり隠退したこと。②天皇の譲位。」と記されているが、実は『古事記』にも『日本書紀』にも「国譲り」という言葉そのものは出てこない。だから、「国譲り」という言葉は『古事記』や『日本書紀』自体の事態説明語句ではなく、後の神話解釈上の概念で、そこで実際に記載されているのは「献」とか「立奉」とかの言葉である。この点は留意しなければならない。　ここで『古事記』の「国譲り」の段を少し詳しく検討してみることにしよう。

1. 天照大御神が「葦原中国」のわが子の「」が「知らす（統治する）国」と定め派遣を命じたが、天の浮橋に立って下界を見ると、「いたくぎてあり」というありさまだったので別の神が派遣されることになった。
2. そこで高御産巣日神と天照大御神は八百万の神々を集めて、誰を派遣して「け」すべきかと問うたところ、「」がよいということになったが、派遣された天菩比命は大国主神に媚びつき、三年が過ぎても復奏しなかった。
3. そこでまた高木神と天照大御神が次にどの神を派遣すべきかを問うたところ、次は「天若日子」がよいということになり、天若日子にとを授けて葦原中国に遣わしたが、天若日子は大国主神の娘の下照比売と結婚し、八年が過ぎても復奏しなかった。
4. そこで天照大御神と高御産巣日神がまた次はどの神を派遣して復奏しない理由を訊ねたらよいかを問うたところ、「雉鳴女」がよいということになり、理由を訊いてくるよう命じたが、天若日子は天の神から授けられ天之麻古弓と天之波波矢を使って雉鳴女を射殺し、その矢が高天原まで飛んで行ったので、高木神（高御産巣日神）は血塗れの矢を下界に投げ返すと、矢は天若日子に当たり、天若日子は死んでしまう。
5. そこでまた天照大御神が次は誰を派遣するとよいか問うたところ、「」がよいということになり、建御雷神と天鳥船神を派遣し、交渉に当たらせた。
6. こうして建御雷神と天鳥船神は、出雲国のの小浜に降り立ち、大国主神に「葦原中国は天照大御神の子孫の統治すべき国である」と国を明け渡すことを迫った。大国主神は息子の事代主神に訊ねると事代主神は「この国は天つ神の御子にらむ」と承服し、船を傾けて天の逆手を打って神霊の籠るに化して海の中に没し隠れた。
7. だが、もう一人の息子の建御名方神はすぐには承服せず、「力競べ」をしようと建御雷神の手を掴んだところ、その手はつららとなり、剣と化し、建御雷神は建御名方神の手を握り潰し投げ飛ばしたので建御名方神は逃走し、科野（信濃）国州羽（諏訪）の海まで逃げて、「この葦原中国は、天つ神の御子の命のに献らむ」と、その地から出ないことを約束した。
8. そこで、建御雷神は出雲に戻り、再度大国主神に明け渡しを迫ると、大国主神は、「僕子等二神隨白、僕之不違。此葦原中国者、隨命既献也。唯僕住所者、如天神御子之天津日継所知之登陀流、天之御巣而、於底津石根宮柱布斗斯理、於高天原氷木多迦斯理而、治賜者、僕者於百不足八十坰手隱而侍。亦僕子等百八十神者、卽八重事代主神爲神之御尾前而仕奉者、違神者非也。（が、二はしらの神の白す隨に、僕ははじ。この葦原中国は、命の随に既に献らむ。ただ僕がをば、天つ神の御子のしらしめす、とだる天の御巣如して、底つ石根に宮柱ふとしり、高天の原に氷木たかしりて、治めたまはば、僕は百足らずに隱りて侍ひなむ。また僕が子等、百八十神は、すなはち八重事代主神、神の御尾前となりて仕へ奉らば、違ふ神はあらじ。）」（倉野憲司読み下し、岩波古典文学大系本）と国土献上（国譲り）を約束したが、その際、「住所」として「天神の御子」が住むのと同じほどの巨大な宮殿を建てることを交換条件とした。
9. そこで、出雲のの浜に巨大な宮殿「」を建てて「の」を奉った。
10. かくして、ようやくにして建御雷神が葦原中国平定をし終えて、「葦原中国をけしつる」を高天原に復奏した。

　『古事記』は以上のような「国譲り」の経緯を大変具体的に詳しく物語っている。このくだりの具体的記述は実に面白くも生々しい。なぜ高天原の神々は「葦原中国」の統治を指令したのか？　この天照大御神や高御産巣日神（高木神）や思金神など「天つ神」の超越的な命令は先住の「国作り」の神々にとっては寝耳に水の「国盗り」の行為ではなかったか？

　だが、その「命」と行為は、「け」とか、「けす」とかと呼ばれている。これは何を物語っているか？　「国」の「譲渡」は武力闘争によって奪い取ったものではなく、あくまでも外交交渉によって平和的に「譲」り受けたものであるという意思表明であり、その政治神学的意味付けである。

　問題はこの時の大国主神の態度と行為である。彼はある意味で理不尽なこの「命」に対して武力行使をして「防衛」しなかった。そして、自分の意思表示を後回しにして、二人の子供たちの意思を確認し、それを踏まえて、「命の随に既に献らむ」と国土献上を約束し、その交換条件として「天御舎」つまり後の出雲大社（杵築大社）の創建を確約したのである。

　『古事記』にはスサノヲノミコト以上に詳しく「国作り」の神である大国主神のことが記録されている。だが、「正史」である『日本書紀』には、その大国主神の記事はほとんどない。その「大国主神」という名前さえ、『日本書紀』神代上第八段第六の「一書曰」の中に、「一書に曰く、大国主神、亦は大物主神とし、亦はとし、亦はと曰し、亦は大国玉神と曰し、亦はと曰す。其の子凡て一百八十一神す。」（訓読、小学館日本古典文学全集本）とあるだけで、それ以外の箇所では一切使われず、『日本書紀』では「大己貴命」で一貫されている。したがって、『古事記』では「国作り」の神とされるが、『日本書紀』ではそのような位置付けも功績も認められない。わずかに第六の一書に「天下経営」したことが小さく記されている。だが、『出雲国風土記』では大きく一貫して「」が使われている。

　このように見てくると、出雲神話の位置が『古事記』にのみ特有の詳細さがあり、そこで「言趣（向）け和平す」という特殊政治神学的用語が使われていることもわかる。その特殊性を踏まえた上で、この戦争回避の「＝国譲り」が持つ「和平」の思想性について考えてみたい。

　『古事記』の出雲神話は二人の特異なキャラクターによって構成されている。スサノヲノミコトと大国主神である。前半部は、暴力的でアグレッシブでトリックスター的なスサノヲノミコトが主人公である。そこでさまざまな形の「暴力」が表現される。スサノヲはそこでは最大最高の暴力の持ち主であり、戦争機械である。そしてその最大暴力ないし戦争機械が八俣大蛇を退治して「和歌＝短歌」を詠む。この「和歌」こそが「言向和平」の伏線である。

　高天原で乱暴狼藉をはたらいて追放されたスサノヲは出雲の地に降り立ち、八俣大蛇を退治してわが国最初の短歌「八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を」を作って歌う文化英雄神となった。スサノヲに退治される八頭八尾の怪物ヤマタノオロチは、眼が真っ赤でその身体には、、杉が生い茂り、その身の丈は八つの谷にまたがるほどの巨大さで、年毎にやって来ては麗しい乙女を食い殺す。そのさまは恐ろしく巨大な怪物で、『風の谷のナウシカ』の「巨神兵」のような巨大暴力を出力する戦争機械である。その巨大暴力を封じ込めて、歌を歌って平安の世界を生み出したのがスサノヲノミコトであるとすれば、平和神の一神としてスサノヲを挙げることもできる。

　だが先に触れたように、その前に、スサノヲ自身、幼少期から啼き叫び続け、青山を枯山になし、海の水を干上がらせる巨大暴力神でもあった。だから、口や尻から食べ物を差し出したを穢れていると殺し、も酒を飲ませて殺してしまうスサノヲは、一面、日本神話の中で最も暴力的で残虐な神である。「荒ぶる神」「ちはやぶる神」の典型がスサノヲである。実際、『日本書紀』では「」は「無道」とか「性残害」とか「性悪」とかと悪神的に記されている。

　だが、この凄まじい荒ぶるエネルギーにあふれたスサノヲと大国主神はまったく違う。『古事記』の出雲神話の後半部はこの大国主神が主人公となる。スサノヲが殺害する神であるのに対して、大国主神は殺害される神である。『古事記』には、二度兄神たちの嫉妬により殺害され、そのつど母や御祖のムスビの神の力で甦った。このように、まったく対照的な神性を持つ二神が出雲神話の主人公であるというのも大変興味深いことである。

　大国主神は『古事記』ではスサノヲの六世の子孫とされ、『日本書紀』本文では実の子神とされる。どちらにせよ、出雲大社（杵築大社）の主祭神となる。そもそもこの出雲という地は、高天原から降りてきた天孫一族（天皇家の祖先）やそれを支える「天つ神々」に対して、先住土着の「国つ神々」の最大の拠点地であった。そしてその「国つ神々」を束ねる「ヌシの神」が「大国主神」であった。

　大国主神は、『古事記』ではオオナムジとかアシハラシコオとかヤチホコとかウツシニタマなど五つの別称を持ち、スクナビコナの神と協力して「国作り」に励み、国土開発と「天下経営」を行なったが、最後には天から降りてきた天孫族（天皇家の祖先神）にその「国」を「立奉＝献」じ「譲」った。日本はこの大国主神の「国譲り」による天つ神々と国つ神々の協定によって成立した「国」である。そして、その「国譲り」の一種の見返りないし返礼として、出雲に日本一の巨大神殿である杵築大社（出雲大社）を建てたが、それだけではない。『古事記』は「天御舎」である杵築大社の創建を詳しく記すが、『日本書紀』神代下第九段第二の「一書曰」には、次のような別伝承が記されている。

　　二神（と）、出雲ののにりて、大己貴神に問ひて曰はく、「汝、此の国を以ちてに奉らむやや」とのたまふ。対へて曰さく、「疑はくは、汝二神、是吾が処に来ませるには非じ。故、許すべからず」とまをす。是に経津主神、す。時に、乃ち二神をし、大己貴神にして曰はく、「今し汝がを聞くに、深く其の理有り。故、更に条々にして勅せむ。夫れ汝が治らす、是吾が孫らすべし。汝は以ちてを治らすべし。又汝が住むべきは、今しらむ。即ちのを以ちて、結びてとし、其のの制は、柱は高く太く、板は広く厚くせむ。又らむ。又汝がひて海に遊ぶ具の為に、高橋・浮橋と天鳥船も供造らむ。又汝がをらむ者は、天穂日命是なり」とのたまふ。是に大己貴神へて曰さく、「天神の、なり。敢へて命に従はざらむや。吾が治らす顕露事は、皇孫治らしたまふべし。吾はりてを治らさむ」とまをす。乃ちを二神に薦めて曰さく、「是、我に代わりて従へ奉るべし。吾は此より避りなむ」とまおし、即ち躬に瑞の八坂をけてに隠りましき。（日本古典文学全集本）

　注意すべき記述であり、異伝承である。ここに一つの分治的な契約が交わされているからである。天の神の命を受けたフツヌシとタケミカヅチはオホナムチに「国譲り＝国土奉献」を迫る。その時、一度はその脅迫じみた居丈だけで唐突な申し出を断っている。当然とも思える反応である。だが、そのことを復命して再度交渉に臨んだ時に交換条件を提示された時には異なる反応をした。それは現在オホナムチが統治する「顕露之事＝天下経営」を「吾孫」に任せ、これから「神事」を治めてくれれば立派な「天日隅宮」を建造し、田を作らせ、遊ぶための橋も船も作り、祭祀者として天穂日命を任命するという条件の提示であった。オホナムチはこの条件を呑み、「岐神」を自分に代わって仕える者として推薦し、これからは「幽事」を治めると言って「隠れ」退いた。

　『日本書紀』神代下第九段第二の一書はさりげなくこの統治者交代劇を記録する。『日本書紀』本文ではなく、第二の一書として。これはいったいどのような編纂意図によるものだろうか？　ここに記録されている統治者の交替は一種の政権交代であるが、単なる権力交替ではない。武力革命でも戦争でもない。あくまでも外交的な交渉により条件を提示する形で世界の治め方を分割・分治するという契約的和睦である。『日本書紀』にはないが、『古事記』はこの交渉過程を「言向和平」と記した。

　もしここで、大国主神が天孫族と戦っていたらどうなったか？　激烈な戦争が起こり、多数の死者が出て、双方が多大なダメージを受ける。勝利者の権力が発揚され、敗者は滅亡するか、生き残っても深い反目と憎悪が残り、末代までその負の感情は伝えられる。そのような負の感情の残り方を避けるための方策として、神殿建築と祭祀と饗応と「神事＝幽事」の分担・分治は、もう一つの生き延び方を示すものであったと言えるかもしれない。

　これはいわゆる戦争ではない。同時に、いわゆる和睦でもない。巧妙な詐術とも疑われるかもしれない微妙な提携と棲み分けである。日本の最古のテキストには、そのような極めて評価の困難な微妙な「和平」のあり方が記されているのである。

　それにしても、杵築大社の巨大さには驚かされる。その大きさは、神社建築としては奇想天外なほどの高さである。一番初めは三十二丈、つまり約九十七メートル近い高さの社殿だったというのだから。それが平安中期に半分の十六丈、約四十八メートルに建て替えられた。そしてさらに江戸時代には現在と同じその半分の八丈、約二十四メートルに建て替えられたという。つまりだんだんと半分の大きさに縮小されてきたというわけだが、この間に何度も地震や強風で倒壊したことが記録されている。世界の古代の巨大建造物の中でもとびきり不安定な構造体がこの出雲神殿であろう。その奇妙さは郡を抜いている。そして同時に、「国譲り」という「言向和平」の奇妙さも理解を超えている。

　この出雲で、平安時代以降に、十月「」を特別に「」と呼ぶ風習が広がっていった。そして毎年旧暦の十月には日本国中の神々が出雲の地に集まって一年間の計画を練ると考えられるようになった。そこで出雲だけ十月を「神有月」と呼び、その他の土地では「神無月」と呼んで区別した。誤解を招く言い方かもしれないが、大国主神の「生存戦略」は間違っていなかったといえるかもしれない。隠れて末永く生き延び、「縁結びの神さま」として尊崇されるようになったのだから。そして一昨年の平成二十五年（二〇一三）の六十年ぶりの「平成の大遷宮」にはこれまでにない多数の参拝者で賑わったというのだから。大国主神の「御神徳」には測り知れない「幽事・神事」の深遠があるといえる。そこに大国主神の「スピリチュアリティ（霊性）」が貫流しているともいえる。

　だが、このいわゆる「国譲り神話」は日本人の「スピリチュアリティ」ばかりではなく、さまざまな場面での意思決定や態度表明のあり方に微妙で決定的な影響と原型的な制約を与えたともいえる。その一つが幕末・明治維新期の「大政奉還」という政治決着であり、もう一つが太平洋戦争の敗戦の際の「無条件降伏」というポツダム宣言受諾の形である。前者を第二国譲り、後者を第三国譲りとして、日本の歴史を貫く「国譲り」のありようと「和平」や「平和」の作り方を検証しなければならない。